

第三十一号

此度慶應昭顯暴徒の征討に係りて、實に容易ならざりし
 事情にて、爾我の死傷頗る夥多ナル迄、然地ノ形勢
 分たス官兵ノ死傷頗る夥多ナル迄、然地ノ形勢
 逐次傳聞致し、其不忠慘ノ状、誠歎スルニ忍
 べサル次第ニ、後抑死者ハ、際々憐ムベシト、虽死生
 復スルノ法ナシ唯傷者ハ、痛甚ク、其狀生死ノ間、
 出度スルヲ以テ、百法救濟ノ道ヲ盡ス、一必要ト
 存存於國り政府に於テハ、看は後醫治ノ方法
 整備スト、虽は連日ノ激戦創傷ノ者漸々増
 自然而ル、届お本年並に、痛々モ可者之、
 察取レシ、
 聖上至仁大ニ宸襟ヲ愜マシ、玉ヒ屢々慰問ノ
 使ヲ差セラレ

皇后宮亦厚ク賜フ所アリタル由、臣子タル者、慙
 泣ノ外ナラ、就只私共此際、臨み、恭世國恩、活レ、
 ン不才、願ハ、一社ヲ結、博愛、名ケ、廣ク、天下、
 告ケテ、有志者ノ
 協参ラ、乞ヒ、社員ヲ、發地ニ、差シ、海陸軍ヲ、
 ノ、指揮ヲ、奉シテ、官兵ノ、傷者ヲ、救濟、
 及、志氣
 ニ、方々、在、且、又、暴徒ノ、死傷ハ、官兵ニ、倍スルノ、
 事ナラ

不救獲ノ方法モ不取誓ハ言ヲ俟タス性ニ傷者ヲ
山脚ニ多シ雨露ニ暴シテ収ムル能ハサル者ノ田此輩ノ
如キ大義ヲ獲リ 王脚ニ敵スト虽凡 皇國ノ人
民タリ 皇家ノ赤子タリ買價望シテ死ヲ待ツモノ
モ撰テ顧ミサルハ人情ノ忌ヒサル所ニ有量亦收養
救治致シ度所存可者之族ヲ朝廷定仁ノ由
主意内外ニ結著スルノミナラス彼徒ヲ懲化スルノ
一端トモ可成半族改業文明ノ國ハ我々平アル毎
自國人ハ勿論他邦ヲモ或ハ金ヲ福ニ或ハ物ヲ
贈リテ善クハ人ヲ善シ彼以別ナリ救濟ヲ為ス

甚タ勤ムルノ慣習ニテ其例ハ救養ニ暇ヲ不餘存
件ノ後ハ一日ノ遲速モ葬多ク人命ニ干シ即決
急施ヲ要シテ有量卒丹誠ノ微意以明察
至急以指令ニ下度仍ニ別紙社則一通未除
此後奉教也

明治五年四月廿

議官佐野常民
議官大給 恒臣

岩倉右大臣殿

願 此 奉 教 同 履 惟 幸